



New ESRI Working Paper No.72

社会生活基本調査から見た
小・中学生の欠食・孤食と主観的健康

符川公平

May 2024



内閣府経済社会総合研究所
Economic and Social Research Institute
Cabinet Office
Tokyo, Japan

New ESRI Working Paper は、すべて研究者個人の責任で執筆されており、内閣府経済社会総合研究所の見解を示すものではありません（問い合わせ先：<https://form.cao.go.jp/esri/opinion-0002.html>）。

新ESRIワーキング・ペーパー・シリーズは、内閣府経済社会総合研究所の研究者および外部研究者によってとりまとめられた研究試論です。学界、研究機関等の関係する方々から幅広くコメントを頂き、今後の研究に役立てることを意図して発表しております。

論文は、すべて研究者個人の責任で執筆されており、内閣府経済社会総合研究所の見解を示すものではありません。

The views expressed in “New ESRI Working Paper” are those of the authors and not those of the Economic and Social Research Institute, the Cabinet Office, or the Government of Japan.

社会生活基本調査から見た 小・中学生の欠食・孤食と主観的健康*

符川公平[†]

要 旨

「よく体を動かし、よく食べ、よく眠る」ということは、成長期の子供にとって必要不可欠である。一方、なかなか子供の食事準備に手が回らない家庭も増えてきているように思われる。

本稿では、総務省実施の生活時間調査である社会生活基本調査から見た小・中学生の欠食・孤食状況を分析した。時系列の推移をみると、朝食・夕食の孤食は、横ばい・やや低下傾向の一方、欠食は増加傾向で、新型コロナ禍を経ても、直近令和3年（2021年）のデータからはトレンドとしての動きの改善は伺えなかった。

朝夕の欠食・孤食は、本人の活動の影響もある一方、共働き世帯、ひとり親世帯といった、子どもとともに過ごす時間の融通が相対的に利きにくい世帯で多くなる様子が明らかとなった。一方、大都市居住や母親の在宅でのテレワーク就業は、子供の夕食欠食確率を一定程度抑えることもわかった。

また、子供の主観的健康との関係では、孤食は必ずしも悪影響があると言えなかったが、朝夕の欠食には悪影響がみられた。

日常生活において、食事は会話が最もしやすい場の一つである。核家族化、共働き世帯が増える中で、子供を健全に育てる環境を守るため、取りうる工夫や取組は、今後さらに重要性を増していくものと考えられる。

* 分析に当たっては、大竹文雄 京都大学経済研究所特定教授／大阪大学感染症総合教育研究拠点特任教授のご指導を受けました。また、本稿の作成にあたって有益なアドバイスを頂いた増島稔経済社会総合研究所前所長（現 SBI 金融経済研究所研究主幹・チーフエコノミスト）、村山裕経済社会経済研究所長、野村裕経済社会総合研究所次長、第 127 回京都大学経済研究所先端政策分析研究センター（CAPS）研究会（2024 年 2 月 14 日開催）において貴重なコメントをくださった参加者の方々に御礼を申し上げます。

[†] 京都大学経済研究所特定准教授、内閣府経済社会総合研究所特別研究官

1. はじめに

「よく体を動かし、よく食べ、よく眠る」ということは、成長期の子供にとって必要不可欠である。また、家族と一緒に食事をするのが重要だと思う人も、意識調査では9割に達する（農林水産省「平成29年食育に関する意識調査」）。

一方で、核家族化の進展等から、なかなか子供の食事準備に手が回らない家庭も増えてきているようにも思われる。

この点、政府は、第4次食育基本計画（令和3年から5年間で計画期間）で、朝食または夕食を家族と一緒に食べる「共食」回数を週11回以上（1週間の朝・夕食、全14回中）、朝食を欠食する子供（小学生）の割合を0%とする目標を定めている（図表1-1）。また、新型コロナ禍以降の「新たな日常」への対応に伴う暮らし方や働き方の変化が、共食の回数を増やす契機の一つになることへの期待も、計画は示している。

この政府目標の「共食」頻度は、農林水産省「食育に関する意識調査」（調査対象は満20歳以上の成人）で把握されるが、成人の共食頻度は子供よりはそもそも低く、週9-10回である。また、子供の欠食状況は文部科学省「全国学力・学習状況調査」で把握されている。

また、これまで子供の欠食・孤食については、子供たちの生活全般に関する意識や実態を把握するために実施されたアンケート調査等を通じ、生活習慣・家庭環境等の要因を明らかにする研究が行われてきている[‡]（図表1-2）。

一方、子供の欠食・孤食の状況は、社会生活基本調査からも把握可能である。社会生活基本調査は、総務省が5年に1度実施する大規模な生活時間調査（令和3年：約9.1万世帯の19万人が調査対象）であり、10歳以上の個人を対象に、15分単位で誰と何をしたかに関する情報、主観的な健康状態等の質問がある。

図表1-1 第4次食育基本計画における目標値と実績値

目標	目標値	計画作成時 (2020年度)の 値	現状値(令和5 年度)	データ出所	備考
2 朝食または夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数を増やす					
朝食または夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数	週11回以上	週9.6回	週9.0回	農林水産省「食育に関する意識調査」	調査対象は、満20歳以上の成人
4 朝食を欠食する国民を減らす					
朝食を欠食する子供の割合	0%	4.6%	5.6%	文部科学省「全国学力・学習状況調査」	調査対象は、小学6年、中学3年の全児童(悉皆調査)

(備考) 1. 農林水産省「令和5年度食育白書」、「令和5年度食育に関する意識調査報告書」より筆者作成。

2. 「共食」回数に関する政府目標は、国民全体が対象。

3. 欠食の値は、「朝食を毎日食べていますか」という質問に対して、「あまりしていない」、「全くしていない」と回答した割合の合計であり、小学6年生の値。

[‡] また、共食と、食生活の良好さ、心身の健康や健全な生活への影響、家族関係の良好さといった観点の研究も多くなされてきている（先行研究のレビュー例として、會退・衛藤（2015）、農林水産省「平成29年度食育白書」、Glantz et al. (2021) がある。）

図表 1-2 欠食・孤食と本人の生活習慣・家庭環境に関する研究例

研究例	データ	主な結論
中堀他 (2016)	富山県高岡市内の5小学校の小学1～6年生児童2057人とその保護者に対するアンケート調査	母が有職の場合、核家族の場合、朝、夕食の孤食がある場合、保護者の食意識が低い場合、子供は朝食を欠食しやすい。
石塚他 (2015)	私立初等中等教育学園の小学4～6年生231名、中学生450名	小学生は、朝食と夕食の孤食が、親子関係と家庭生活に関する低QOLに関連している。中学生も、朝食の孤食は、親子関係と家庭生活に関する低QOLと関連している。
河村他 (2013)	Benesse教育研究開発センター実施「第1回子供生活実態基本調査、2004」から中学1年～高校2年の9079人のデータ	女性、起床時間が遅い、夕食を一人で食べる頻度が高い、平日ゲームセンター・カラオケで遊ぶ頻度が高い、親との会話頻度が少ない、(東京圏ではなく)中都市、郡部に居住している場合、朝食欠食頻度が有意に高い。
石田他 (2017)	内閣府実施「親と子の生活意識に関する調査、2011」から、中学3年生とその母親各2,067人(母子世帯の母子各244人)	女性、起床時間・就寝時間が遅い、本人の自己肯定感が低い、家庭の雰囲気があたたかくない、核家族の専業主婦世帯に比べて母子世帯の場合、朝食摂食頻度が低い。

また、社会生活基本調査は、直近は、令和3年(2021年)10月に調査を実施しており、新型コロナ禍を経ての生活変化の過渡的状況も確認できる[§]。

そこで、本研究では、10歳以上の小学生・中学生に注目し、社会生活基本調査の個票データから明らかとなる、小中学生の欠食・孤食状況を整理し、その背景となっている家族属性、その主観的な健康への影響を検討することとした。

本研究の構成は、まず第2節で使用するデータと欠食・孤食の集計方法について説明し、小中学生の欠食・孤食の時系列的推移を整理する。次に、第3節では、小中学生の欠食・孤食が生じる家庭の属性、父母の就業との関係を分析する。その際、コロナ禍で増えたテレワークの効果を確認する。第4節では、小中学生の欠食・孤食の主観的健康への影響を分析する。最後に第5節で結論をまとめる。

2 社会生活基本調査から見た小中学生の欠食・孤食の状況

(1) 使用データと欠食・孤食の集計方法

本稿では、総務省統計局が実施した社会生活基本調査(調査票A)の個票データを使用する。社会生活基本調査では、対象世帯の10歳以上のすべての個人が、連続する2日間の行動を記入する。

調査票Aは、記入方式としてプレコード方式を取っており、15分ごとに「食事」を含む20種類の行動から一つが選択されている。また、各時刻に「一緒にいた人」として、「一人で」、「家族」、「学校・職場の人」、「その他の人」を回答(重複回答可)することとなっている。

ここでは、朝食を4時～11時の食事、夕食を16時～24時の食事とし、先行研究(金子・

[§] 令和3年9月に緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置がすべての地域で解除されており、その直後の時期に実施された調査である。

花田（2016）を参考に、その時間帯に一度も食事の記録がないものを欠食（「食事なし」）、その時間帯に食事をしているが、誰と一緒に食事したかの記録が一切ないものを「不明」、「家族と」、「友達（学校・職場の人）と」、「その他の人と」一切一緒に食事をしておらず、「一人で」食事をしたものを孤食として集計した。また、「家族と」、「友達と」、「その他の人と」、「一人で」、「不明」の順に優先して分類し、一部の時間でも例えば「家族と」食事している場合は「家族と」の食事とした。以下の集計、分析にあたっては、社会生活基本調査の個票データに含まれる集計用乗率を用いた。

（2）令和3年データからみた小中学生の食事のとり方

以上のような考え方で、令和3年の社会生活基本調査のデータ（休日、平日とも、全日分）を用いて、属性（年齢階級）別に朝食・夕食の取り方を集計した結果を図表2-1に示した。

まず、先にも触れた通り、朝食、夕食ともに、学齢期の子供は現役世代や高齢世代よりも家族との共食頻度は高く、特に、小学生は、朝食、夕食とも8割以上が共食している。また、学齢期の子供は、現役世代や高齢世代よりも孤食が少ないことも確認できる。

次に、学齢期の子供の中でも、小学生、中学生、高校生と年齢が上がっていくにつれ、朝食・夕食とも、共食は減り、欠食、孤食が増えることがわかる。子供自身が独立した活動の範囲を広げるに伴い、一人での食事、家族以外の人との食事も増えているものと考えられる。

なお、この集計では、夕食欠食（「食事なし」）が小学生で6%、中学生で7%となったが、欠食については、調査の性格上、非常に短時間の食事の場合、同一時間により長く行った他の行動が記録され、食事の記録がされないという事情が存在する。このため、欠食については、「欠食 or 非常に短時間の食事」として理解するほうが正確かもしれない、という点は留意が必要である**。

図表2-1 属性（年齢階級）別朝食・夕食の取り方（令和3年社会生活基本調査）

	朝食					夕食				
	小学生	中学生	高校生	現役世代 (19-64 歳)	高齢世代 (65歳以 上)	小学生	中学生	高校生	現役世代 (19-64 歳)	高齢世代 (65歳以 上)
食事なし（欠食）	7%	13%	24%	30%	8%	6%	7%	9%	13%	7%
不明	5%	7%	4%	5%	12%	4%	7%	5%	6%	10%
一人で（孤食）	5%	8%	14%	24%	27%	1%	3%	7%	18%	20%
その他の人と	0.1%	0.1%	0.3%	1%	1%	0.5%	0.4%	1%	2%	1%
友達と（学校の人と）	2%	2%	2%	1%	0.3%	1%	2%	3%	2%	0.3%
家族と（共食）	81%	70%	55%	39%	52%	87%	81%	76%	60%	62%

（備考）1. データは休日、平日ともに含む全日分。

2. 標準誤差を考慮して、小数点以下は四捨五入した。ただし、四捨五入してゼロとなるセルのみ、有効数字1桁目のみ示すこととした。

** 調査ごとの特徴という面もあると考えられるが、例えば、厚生労働省「国民健康・栄養調査」では、学齢期（7-14歳）児童に夕食欠食はほとんど見られない。

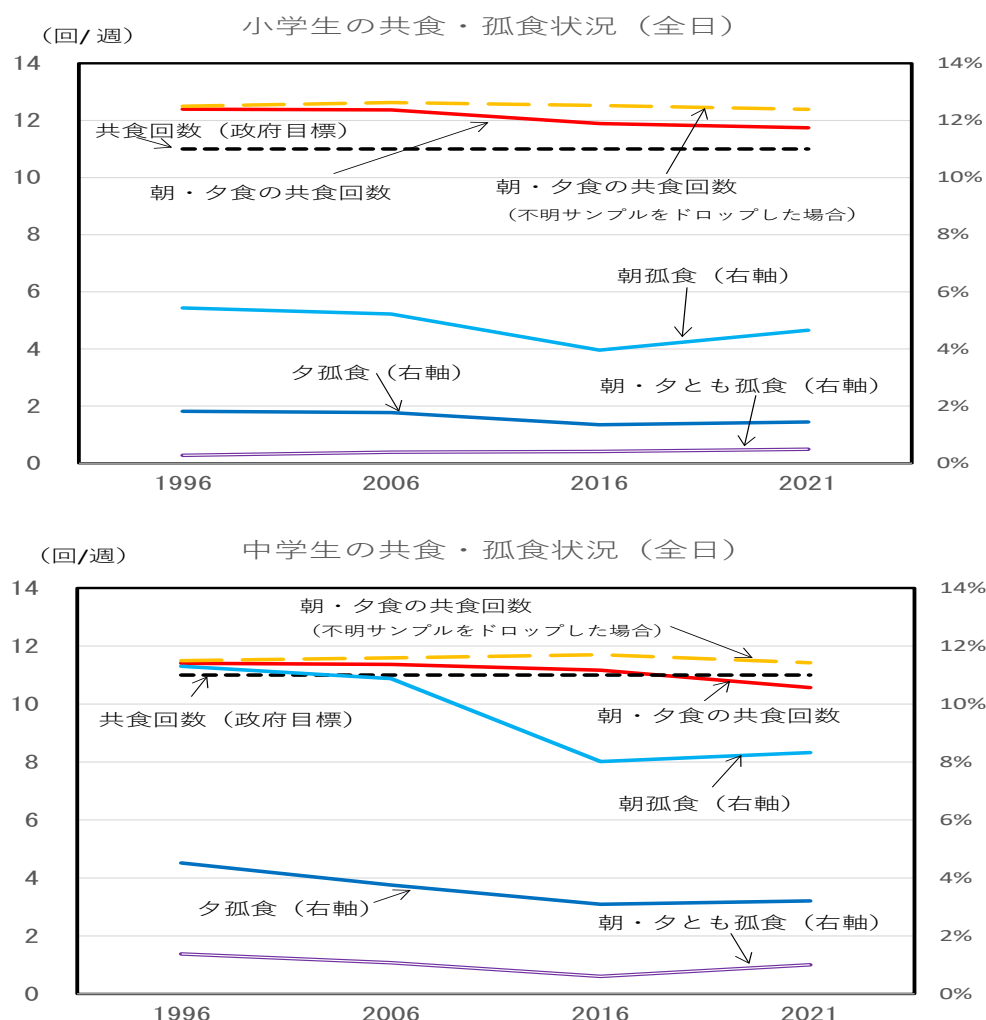
(3) 小中学生の欠食・孤食の時系列推移

次に、図表2-1の集計と同様の集計を過去のデータにさかのぼり行った。その結果を小学生、中学生別に時系列で示したものが図表2-2、図表2-3である。

図からは、主に3つの特徴が指摘できる。1つ目は、先ほど来の指摘と重なるが、(朝・夕食とも共食した場合、週14回共食、朝・夕食のいずれか共食した場合、週7回共食と考えて)1週間の共食回数を試算すると、小学生、中学生はいずれも政府目標より概ね多く共食している(図表2-2)。ただし、時系列をみると2021年はやや減っている。

2つ目は、小学生・中学生の朝食・夕食の孤食は、時系列をみると、横ばいかやや低下傾向にある。ただし、2021年は、2016年よりやや増えている。

図表2-2 小中学生の共食・孤食の時系列推移

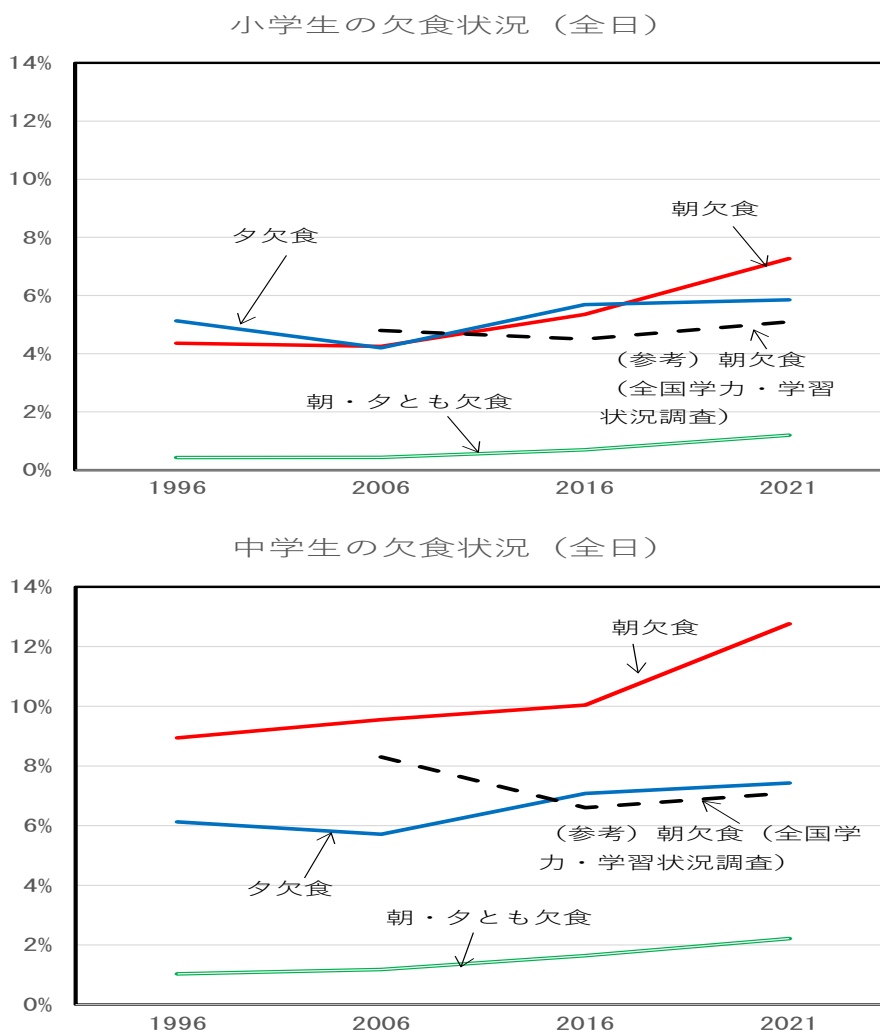


(備考) 1. 共食回数は、朝・夕食とも共食した場合、週14回共食、朝・夕食のいずれかを共食した場合、週7回共食と考えて試算した値。
 2. 図中赤線(朝夕の共食回数)は、「不明」サンプルも含め試算(「不明」は食事はしているが、共食でないものとして計算)しており、「不明」が年を追うごとに増えている影響で共食回数がやや低めに出ている可能性がある点は留意が必要(影響を見るため、「不明」を除いて試算した値を橙色破線で示した)。

3つ目は、小学生・中学生の朝食・夕食の欠食は、増加傾向にあり、朝・夕とも欠食も2021年は増加している（図表2-2）。

ここまですを総括すると、新型コロナ禍で自宅で食事を食べる回数や家族と食事を食べる回数が増えたとの調査結果もあるが、2021年は5年前に比べ、小中学生の共食は増えているとは言えず、欠食・孤食もやや増えている。トレンドとしての動きの改善は伺えないと言える。

図表2-3 小中学生の欠食の時系列推移



(備考) 全国学力・学習状況調査は小学6年生、中学3年生に対する調査結果。朝欠食の割合は、「朝食を毎日食べていますか」という質問に対し、「全くしていない」、「あまりしていない」と回答した割合の合計。2006年の値は、2007年度の調査結果の値（調査が2007年度からのため）。

3 欠食・孤食と家庭状況

(1) 欠食・孤食と家庭環境

こうした子供の欠食・孤食をはじめとする食事のとり方に影響する要因としては、本人の生活行動（朝練、塾等）、保護者の仕事の忙しさや食習慣・食意識、生活の夜型化等の生活習慣、こうした意識・習慣の背景とも考えられる、家族の核家族化・共働き世帯の増加傾向といった点の指摘がされてきている。

例えば、朝食欠食について、先行研究では、家族構成としてはひとり親家庭や核家族、母が有職の場合、居住地が大都市に比べ中都市、郡部で生じやすいとの分析結果が示されている（中堀他（2016）、河村他（2013）、石田他（2017）、図表 1-2 参照）。

そこで、ここでは、まず、令和3年のデータを用いて、朝食、夕食の欠食・孤食について、その要因となる本人の活動（朝練、塾、クラブ等）を考慮したうえで、家族構成・親の就業の影響を検討することとする。具体的には、以下のロジットモデルを推計した。

朝食・夕食の欠食・孤食 = f (性別、年齢、等価世帯所得、本人の活動、家庭環境要因)

推計に使用した変数の記述統計・定義は付図表 1 に示した。被説明変数は、朝食、夕食を欠食・孤食した場合に 1、それ以外の場合に 0 を取るダミー変数である。説明変数は、欠食・孤食に影響のあると考えられる本人属性の他、本人の活動、家庭環境要因である。

本人の活動としては、朝練、塾、クラブ活動を考慮し、それぞれ、朝食、夕食の欠食・孤食に影響しそうな時間帯の活動として定義した。具体的には、「朝練」は朝 5 時から 8 時の間の学校の人とのスポーツ又は文科系クラブ活動等の活動、「塾」は夕方 18 時～21 時における学校の人またはその他の人との学業、「クラブ活動等」は、夕方 18 時～21 時における学校の人とのスポーツ又は文科系クラブ活動等の活動^{††}とした。

家庭環境要因としては、家族構成を三世帯家庭、核家族、ひとり親家庭、単身赴任世帯等のその他世帯の 4 つに大きく分類したうえで、核家族については、父母の就業状態を考慮して、核家族・専業主婦（主夫）世帯、核家族・共働き世帯、核家族・その他世帯（核家族の自営業世帯等）とさらに 3 分割した^{††}。

なお、以下の分析は、土・日曜日といった休日は家庭ごとに過ごし方、時間の使い方には

^{††}調査項目の「学習・自己啓発・訓練（学業以外）」には、クラブ活動で行うパソコン学習等が、「趣味・娯楽」には、クラブ活動で行う楽器の演奏が含まれており、それらが文科系クラブ等の活動として考慮されている。ただし、同じ「趣味・娯楽」には、映画鑑賞やゲーム機で遊ぶ、マンガを読む等が含まれていることから、「クラブ活動等」ダミーには、放課後、学校の友達とゲーム機で遊ぶ、映画館・ゲームセンターに行く、マンガを読むといった活動も含まれている。

^{††} 核家族世帯について、共働き世帯は夫婦とも被用者の世帯、専業主婦（主夫）世帯は夫婦の片方が被用者、もう片方が仕事をしていない世帯と定義している。被用者と自営業の間で生活時間の自由度が異なると考えたためであり、例えば、父母のいずれかが自営業の世帯は、核家族・その他の世帯に含まれる（なお、自営業には、自営業主、家族従業者の他、会社などの役員、内職者が含まれている）。

らつきが大きく、把握が困難な要因の影響が大きいと考えられたため、土・日曜日を除く平日、かつ子供本人がふだんの日（病気で学校を休んだり、遠足のような行事の日ではない日）としたサンプルに絞っている。また、2日とも回答しているサンプルについては、1日目の回答を利用した^{§§}。

推計の結果は図表3-1に示されている。まず、本人の活動を見ると、朝練、塾は、それぞれ朝食、夕食の孤食を有意に高めるが、欠食には有意な影響はない。ただし、夕食欠食については、12歳、15歳の受験期に年齢ダミーが正に有意となっており、塾の影響は実際もう少し大きいかもしれない。クラブ活動等は、夕食欠食・孤食に有意に影響していない。

世帯属性についてみると、ひとり親世帯では、朝食欠食・孤食、夕食欠食について、参照値の三世代家庭に比べて有意に発生しやすい。また、核家族・共働き世帯、単身赴任世帯を含むその他世帯も、朝食欠食が有意に多い。一方、大都市居住は、夕食欠食を有意に減らす。

図表3-1 小中学生の朝食欠食・孤食と家庭環境

[1] 被説明変数：欠食・孤食確率（欠食・孤食=1、喫食・共食=0）

		① 朝食欠食		② 朝食孤食		③ 夕食欠食		④ 夕食孤食	
		係数	Z値	係数	Z値	係数	Z値	係数	Z値
本人属性									
性別（男性）	女性ダミー	0.12	0.68	0.00	0.00	-0.12	-0.53	-0.37	-1.46
年齢 (10歳)	11歳ダミー	-0.27	-0.80	-0.31	-0.86	-0.03	-0.08	-0.07	-0.13
	12歳ダミー	0.17	0.59	0.13	0.33	0.91	2.42 **	0.21	0.43
	13歳ダミー	0.66	2.38 **	0.25	0.75	0.55	1.53	0.55	1.09
	14歳ダミー	0.92	3.30 ***	0.70	2.24 **	0.28	0.88	0.44	0.92
	15歳ダミー	1.10	3.64 ***	0.40	1.18	0.73	2.24 **	1.35	2.89 ***
本人の活動	朝練ダミー	-0.58	-0.81	0.96	2.15 **				
	塾ダミー					0.72	1.35	0.88	2.29 **
	クラブ活動等ダミー					0.49	1.21	-0.17	-0.32
世帯属性									
世帯所得	等価所得	-0.06	-0.90	-0.02	-0.36	0.04	0.64	0.07	1.04
世帯構成/就業形態 (三世代家庭)	核家族・専業主婦世帯	0.35	0.91	0.81	2.10 **	-0.36	-0.91	-0.61	-1.16
	核家族・共働き世帯	0.65	2.22 **	0.30	0.98	0.07	0.22	-0.19	-0.52
	核家族・自営その他世帯	0.33	0.92	-0.16	-0.41	-0.45	-1.22	-0.17	-0.36
	ひとり親世帯	1.38	3.70 ***	1.19	2.90 ***	0.84	2.14 **	-0.03	-0.05
	その他世帯（単身赴任世帯含む）	1.03	2.66 ***	0.01	0.03	0.20	0.45	-0.89	-1.48
居住地	大都市ダミー	-0.18	-0.70	-0.01	-0.02	-0.61	-2.00 **	-0.16	-0.42
	切片	-3.61	-8.05 ***	-3.35	-7.82 ***	-3.29	-7.40 ***	-3.94	-7.90 ***
Num Obs		4,081		4,081		4,081		4,081	
Log Likelihood		-4220891		-3873315		-4056691		-2192002	
R squared		0.049		0.037		0.044		0.048	

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.10

(備考) 1. () 内は各ダミーのレフェレンスグループ

2. 核家族世帯は専業主婦世帯、共働き世帯、自営その他世帯に3分類している。専業主婦（主夫）世帯は、夫婦の片方が被用者、もう片方が仕事をしていない世帯。共働き世帯は、夫婦とも被用者の世帯。自営その他世帯は、専業主婦世帯、共働き世帯以外の世帯。

§§ 2日目の回答を利用しても、主な結論は変わらなかった。

次に、係数からは効果量が不明であることから、得られた結果をもとに、世帯属性別、本人の活動別に予測確率、平均限界効果を算出した（図表3-2）。

朝食・夕食の欠食・孤食の予測確率を全体としてみると、三世代家庭、核家族・自営その他世帯が相対的に欠食・孤食確率が低めである。それらに比べ、核家族・専業主婦世帯は、夕食の欠食・孤食は少なめであるが、朝食の孤食が多く、核家族・共働き世帯は、朝食・夕食ともにやや高めである。一方、ひとり親世帯は、朝食欠食・孤食、夕食欠食の確率が10%を超えており、最も少ないものと比べると3倍程度高いことがわかる。

また、本人の活動としての朝練、通塾は、朝食孤食、夕食欠食の確率をひとり親家庭と同水準に高める***。

総じてみると、子供の欠食・孤食確率は、本人の活動の影響も大きいですが、それと同程度に世帯特性の影響もあり、相対的に生活時間の融通が効きにくいと考えられる世帯で多く発生していると考えられる。

図表3-2 世帯属性別・本人の活動別の予測確率と平均限界効果

		① 朝食欠食		② 朝食孤食		③ 夕食欠食		④ 夕食孤食					
		予測確率	平均限界効果	予測確率	平均限界効果	予測確率	平均限界効果	予測確率	平均限界効果				
世帯構成/就業形態	三世代家庭	0.032	***	base	0.038	***	base	0.054	***	base	0.030	***	base
	核家族・専業主婦世帯	0.045	***	0.013	0.082	***	0.044	0.039	***	-0.016	0.017	**	-0.013
	核家族・共働き世帯	0.060	***	0.028	0.051	***	0.013	0.058	***	0.004	0.025	***	-0.005
	核家族・自営その他世帯	0.044	***	0.012	0.033	***	-0.005	0.035	***	-0.019	0.025	***	-0.005
	ひとり親世帯	0.117	***	0.085	0.116	***	0.078	0.118	***	0.063	0.029	***	-0.001
	その他世帯（単身赴任世帯含む）	0.085	***	0.053	0.039	***	0.000	0.066	***	0.012	0.013	**	-0.017
居住地	大都市	0.049	***	-0.009	0.051	***	0.000	0.034	***	-0.027	0.020	**	-0.003
	本人の活動												
	朝練	0.033		-0.024	0.122	**	0.072						
	塾							0.101	**	0.049	0.051	***	0.029
	クラブ活動等							0.083	***	0.031	0.020	**	-0.003

*** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.10$

（2）欠食・孤食と父母のテレワーク就業

次に、父母のテレワーク就業は、子供の欠食・孤食に影響するかを検討した。

調査票から、テレワークについて、在宅勤務とそれ以外の把握ができ、在宅以外は、サテライトオフィスにおける勤務や顧客先におけるモバイルワーク等が含まれている。この点、家庭生活との関係では、在宅テレワークであるかが重要と考えられたため^{†††}、調査日を、ふだんの日、休みの日に加え、在宅勤務でのテレワークの日（在宅テレワーク）と、それ以外のテレワークを含む「出張・サテライトオフィス」の日に4分類し、父母にとっていずれの日か追加的に考慮することとした。

*** ただし、通塾での夕食欠食は、先にも述べたデータの特徴から、実際には塾の合間にお弁当を食べる等、食事をしている可能性が考えられることには留意が必要である。

††† 令和3年の社会生活基本調査を用いて、テレワーカーの生活時間パターンを分析した大久保他（2024）によると、在宅以外のテレワーカーは、生活時間が通勤勤務者と似ている、としている。

まず、父親の在宅テレワークについて検討した結果を見ると、参照値であるふだんの日に比べて、有意に欠食・孤食に影響しているとはいえなかった^{***}（図表3-3）。

一方、母親が在宅テレワークであったり、休みの日であると、参照値であるふだんの日に比べて、夕食欠食が有意に起きにくくなるとの結果となった（図表3-4）。

平均限界効果を見ると、母の在宅テレワークは、夕食欠食の確率を4%程度押し下げることがわかった。

図表3-3 小中学生の朝食欠食・孤食と父の在宅テレワーク

[2] 被説明変数：欠食・孤食確率（欠食・孤食=1、喫食・共食=0）

		① 朝食欠食			② 朝食孤食			③ 夕食欠食			④ 夕食孤食				
		係数	Z値	平均限界効果	係数	Z値	平均限界効果	係数	Z値	平均限界効果	係数	Z値	平均限界効果		
本人属性															
性別（男性）	女性ダミー	-0.09	-0.49	-0.004	0.02	0.10	0.001	-0.05	-0.26	-0.003	-0.34	-1.31	**	-0.008	
年齢 (10歳)	11歳ダミー	-0.51	-1.40	-0.024	-0.16	-0.41	-0.007	-0.13	-0.37	-0.006	0.07	0.12		0.002	
	12歳ダミー	0.03	0.08	0.001	0.16	0.35	0.008	0.66	1.67	*	0.032	0.13	0.24	0.003	
	13歳ダミー	0.55	1.82	*	0.026	0.47	1.33	0.022	0.36	1.00	0.017	0.72	1.33	0.016	
	14歳ダミー	0.96	3.28	***	0.045	0.74	2.20	**	0.035	0.25	0.75	0.012	0.55	1.05	0.012
	15歳ダミー	0.98	2.89	***	0.046	0.46	1.21		0.021	0.56	1.60	0.027	1.40	2.75	***
本人の活動	朝練ダミー	-1.41	-1.68	*	-0.038	1.12	2.33	**	0.086						
	塾ダミー								0.72	1.43	0.047	0.84	2.00	**	0.027
	クラブ活動等ダミー								0.42	0.91	0.024	-0.26	-0.44		-0.005
世帯属性															
世帯所得	等価所得	-0.09	-1.51	-0.004	-0.01	-0.17	-0.001	-0.04	-0.83	-0.002	0.04	0.54		0.001	
世帯世帯構成 (三世帯家庭)	核家族・専業主婦世帯	0.44	1.13	0.015	0.81	2.10	**	0.045	-0.38	-0.95	-0.017	-0.65	-1.24	-0.015	
	核家族・共働き世帯	0.70	2.41	**	0.028	0.26	0.84	0.011	0.05	0.16	0.003	-0.22	-0.62	-0.006	
	核家族・自営その他世帯	0.40	1.11		0.013	-0.26	-0.65	-0.009	-0.42	-1.14	-0.018	-0.19	-0.41	-0.005	
	ひとり親世帯	0.75	1.05		0.031	1.33	1.60	0.094	0.51	0.76	0.033	0.00	0.01	0.000	
	その他世帯（単身赴任世帯含む）	0.93	1.66	*	0.041	0.14	0.26	0.006	0.66	0.92	0.046	-2.04	-2.81	***	
居住地	大都市ダミー	-0.55	-1.82	*	-0.023	0.31	1.07	0.016	-0.53	-1.68	*	-0.023	0.03	0.08	0.001
調査日															
父の状況 (ふだんの日)	在宅テレワーク	-0.21	-0.33	-0.009	-0.31	-0.61	-0.013	0.92	1.64	0.067	0.41	0.68		0.010	
	出張・サテライトオフィス	0.26	0.54	0.014	-0.22	-0.43	-0.009	-0.29	-0.65	-0.012	0.63	1.21		0.018	
	休みの日	-0.11	-0.28	-0.005	0.24	0.78	0.013	-0.40	-1.32	-0.016	0.21	0.45		0.005	
	切片	-3.27	-7.49	***	-3.51	-7.54	***	-2.91	-6.79	***	-3.99	-7.28	***		
Num Obs		3,579			3,579			3,579			3,579				
Log Likelihood		-3430974			-3312638			-3448584			-1963872				
R squared		0.049			0.036			0.046			0.050				

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.10

(備考) 1. () 内は各ダミーのレフェレンスグループ

- 核家族世帯は専業主婦世帯、共働き世帯、自営その他世帯に3分類している。専業主婦（主夫）世帯は、夫婦の片方が被用者、もう片方が仕事をしていない世帯。共働き世帯は、夫婦とも被用者の世帯。自営その他世帯は、専業主婦世帯、共働き世帯以外の世帯。

*** ただし、夕食は、父親が在宅テレワークをすると欠食・孤食が増える傾向がみられた。この要因として、父親が在宅テレワークをする日に、母親が長めに働くという形で役割分担をしていることが可能性として考えられたが、父親の在宅テレワーク有無別にクロス集計をした結果から見ると、母親のふだんの仕事時間と父親が在宅テレワークした日・当日の仕事時間に違いは見られず（付図表2参照）、検討はしたもの理由は不明であった。

図表3-4 小中学生の朝食欠食・孤食と母の在宅テレワーク

[3] 被説明変数：欠食・孤食確率（欠食・孤食=1、喫食・共食=0）

		① 朝食欠食			② 朝食孤食			③ 夕食欠食			④ 夕食孤食				
		係数	Z値	平均限界効果	係数	Z値	平均限界効果	係数	Z値	平均限界効果	係数	Z値	平均限界効果		
本人属性															
性別 (男性)	女性ダミー	0.11	0.64	0.006	-0.01	-0.03	0.000	-0.18	-0.79	-0.008	-0.32	-1.25	-0.007		
年齢 (10歳)	11歳ダミー	-0.24	-0.70	-0.013	-0.19	-0.52	-0.009	-0.04	-0.13	-0.002	-0.21	-0.39	-0.005		
	12歳ダミー	0.20	0.65	0.010	0.22	0.51	0.010	0.68	1.59	0.031	0.15	0.29	0.003		
	13歳ダミー	0.69	2.42	**	0.036	0.38	1.11	0.018	0.55	1.52	0.025	0.53	1.03	0.012	
	14歳ダミー	1.02	3.56	***	0.053	0.82	2.55	**	0.040	0.33	1.00	0.015	0.44	0.89	0.010
	15歳ダミー	1.09	3.42	***	0.057	0.44	1.26	0.021	0.70	2.05	**	0.032	1.31	2.79	***
本人の活動	朝練ダミー	-0.57	-0.81	-0.023	0.98	2.21	**	0.073							
	塾ダミー							0.76	1.40	0.047	0.93	2.45	**	0.031	
	クラブ活動等ダミー							0.33	0.76	0.018	-0.05	-0.10	-0.001		
世帯属性															
世帯所得	等価所得	-0.06	-0.89	-0.003	-0.04	-0.58	-0.002	-0.01	-0.15	0.000	0.05	0.80	0.001		
世帯世帯構成 (三世代家庭)	核家族・専業主婦世帯	0.51	1.26	0.018	0.80	2.06	**	0.043	-0.42	-1.07	-0.017	-0.74	-1.34	-0.015	
	核家族・共働き世帯	0.76	2.50	**	0.031	0.30	0.98	0.013	0.13	0.42	0.007	-0.20	-0.57	-0.005	
	核家族・自営その他世帯	0.41	1.08	0.014	-0.18	-0.47	-0.006	-0.40	-1.09	-0.017	-0.15	-0.34	-0.004		
	ひとり親世帯	1.63	4.10	***	0.102	1.11	2.55	**	0.070	0.48	1.18	0.030	-0.06	-0.09	-0.002
	その他世帯 (単身赴任世帯含む)	1.30	3.13	***	0.068	-0.07	-0.16	-0.002	-0.77	-1.83	*	-0.028	-0.96	-1.41	-0.018
居住地	大都市ダミー	-0.13	-0.52	-0.007	-0.01	-0.03	0.000	-0.42	-1.36	-0.017	-0.10	-0.26	-0.002		
調査日															
母の状況 (ふだんの日)	在宅テレワーク	0.61	0.99	0.040	0.17	0.27	0.009	-1.45	-2.01	**	-0.042	-0.22	-0.21	-0.004	
	出張・サテライトオフィス	0.12	0.14	0.007	0.02	0.04	0.001	-0.65	-0.91		-0.026	-0.30	-0.42	-0.006	
	休みの日	0.28	1.02	0.016	-0.09	-0.34	-0.004	-0.68	-2.09	**	-0.026	0.35	0.83	0.009	
	切片	-3.81	-8.06	***	-3.37	-7.62	***	-2.97	-6.73	***		-3.91	-7.74	***	
Num Obs		3,954		3,954		3,954		3,954		3,954		3,954			
Log Likelihood		-4073044		-3724416		-3696425		-2110441							
R squared		0.056		0.037		0.042		0.052							

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.10

- (備考) 1. () 内は各ダミーのレフェレンスグループ
 2. 核家族世帯は専業主婦世帯、共働き世帯、自営その他世帯に3分類している。専業主婦(主夫)世帯は、夫婦の片方が被用者、もう片方が仕事をしていない世帯。共働き世帯は、夫婦とも被用者の世帯。自営その他世帯は、専業主婦世帯、共働き世帯以外の世帯。

4. 小中学生の欠食・孤食と（主観的）健康について

それでは、このような小中学生の欠食・孤食は、主観的健康にどのような影響を与えているだろうか。

この点、先行研究によると、朝、夕の共食をしている子供の方が、心身の不調が少なく、孤食をしていると健康満足度が低い傾向があるとするものがある（図表4-1）。また、朝食を食べる頻度が低いと、自覚症状・不定愁訴・疲労の訴えが多いとする研究例も多く存在する^{§§§}。

社会生活基本調査では、本人の主観的な申告による健康状態の質問として、「ふだんの健康状態」を5段階（良い、まあ良い、ふつう、あまり良くない、良くないの5段階）で聞いている。ここでいうふだんの健康状態は、ふだんの生活（学業、運動、食事、外出、衣服着脱等）への影響の有無などから判断され、サンプルの小中学生は、平均的に「まあ良い」～「良い」と回答している（付図表1）。

まず、この主観的健康と欠食・孤食の関係について、クロス集計した数値を確認すると、朝食・夕食を欠食、孤食していても平均は4点（「まあ良い」）以上だが、欠食している場合は、やや値が低いことが確認できる（図表4-2）。また、それぞれの分布を比較すると、朝食の孤食と共食の間には差が見られなかったが、朝夕の欠食、夕食の孤食とそれぞれの共食の間では、主観的健康に有意な違いがみられた（ χ^2 検定の結果）。

ただし、この結果は、子どもの年齢、本人の活動、家族形態等をコントロールできておらず、そうした要因の影響を受けていると考えられる。そこで、ここでは Propensity Score Matching の手法を用いて、欠食（孤食）あり／欠食（孤食）なし間でサンプル属性をそろえたうえで、欠食・孤食の主観的健康への影響有無を調べることにする。

図表4-1 欠食・孤食と主観的健康に関する研究例

研究例	データ	主な結論
岡崎他（2012）	埼玉県の小学3年生290人、6年生346人とその保護者に対するアンケート調査	（小学6年生）朝食を大人や誰かと一緒に食べた者は、ひとりで食べた者より、体の不調が「なし」の割合が高く、問題となる態度・行動の「あり」の割合が低い。夕食を大人や誰かと一緒に食べた者は、一人で食べた者よりも（やればできると思う等の）自己効力感が「あり」の割合が高い。
中堀他（2016）	富山県高岡市内の5小学校の小学1～6年生児童2057人とその保護者に対するアンケート調査	朝・夕食で孤食があると、健康満足度は低い傾向があるが有意な差はない。朝・夕食で孤食があると、朝食欠食、1日2回以上の間食、睡眠不足が有意に多い。
衛藤他（2014）	埼玉県の598人の小学5年生、中学2年生時の縦断調査	（中学2年生時）夕食共食頻度及び食事時の自発的コミュニケーションの多さと主観的健康観には関連がある。
谷川他（2020）	青森県内の中学1-3年生415名、東京都多摩地域の中学1-3年生524名	地方の男子生徒で、体の調子を「健康」ととらえていない生徒は、朝食欠食、通塾しており、平日の睡眠時間が少ない。

§§§ 例えば、渡邊他（2016）では、中学生の生活実態と自覚症状等との関連についての系統的レビューを行っている。

図表 4-2 欠食・孤食と主観的健康に関するクロス集計値

主観的健康状態（良くない = 1、良い = 5）	平均値	共食との差	共食との分布の比較 （ χ^2 検定）
朝食共食	4.37	-	
朝食欠食	4.09	-0.28	***
朝食孤食	4.42	0.05	
夕食共食	4.36	-	
夕食欠食	4.10	-0.26	**
夕食孤食	4.37	0.02	**

*** $p < 0.01$, ** $p < 0.05$, * $p < 0.10$

まず、マッチングの第一段階として、図表 3-1 に示した、本人の活動と家族属性を考慮した式をもとに **Propensity Score** を計算し、マッチングを行い、欠食・孤食効果を推計した****。

マッチングに際しては、キャリパーを標準偏差の 0.2 倍とするキャリパーマッチング (Austin, 2011) により、欠食(孤食)あり/欠食(孤食)なしサンプル間で 1 対 1 でマッチングした。また、コモンサポートのオプションを用いた。マッチングの質を示すものとして、マッチングサンプル間の Propensity Score、年齢、本人の活動、世帯類型、等価世帯所得の分布を付図表 2 に示した + + + +。

分析の結果は、図表 4-3 に示されている。朝食、夕食を欠食すると、しない場合に比べて、主観的健康はいずれも 0.2 ポイント、有意に低いとの結果となった。つまり、朝食、夕食を欠食すると、主観的健康に悪影響があるということがわかった。一方で、孤食は主観的健康を悪化させているとは言えなかった。

ただし、この結果については、ここでの主観的健康が、学業をはじめとする「ふだんの生活への影響の有無」を考慮してつけた健康状態であり、何らかの具体的な身体症状や心理的症状等とはまた異なるものであるということには留意が必要である。また、孤食には、欠食や間食の多さにつながる等の問題が別途あることにも留意が必要である。

**** なお、集計用乗率の扱いについては、Stata のヘルプの記載を参考に、Propensity Score の計算においては集計用乗率を考慮せず、マッチング後の処置群・対照群の平均値の計算の際に考慮した。また、マッチングに際しては、Propensity Score の対数オッズ比に基づいてマッチングを行った。

+ + + + サンプルのペア間の共分散行列（サンプルの属性）が類似しているか、バランステスト（Propensity Score の計算に用いる logit モデルの説明変数の平均値が、欠食(孤食)あり/欠食(孤食)なし間で有意に異なるかどうかをテスト）によって確認したところ、欠食(孤食)あり/欠食(孤食)なし間で有意に異なるのは概ねすべての変数で言えないとの結果を得た。

図表 4-3 欠食・孤食の主観的健康への影響 (Propensity Score Matching の結果)

主観的健康状態 (良くない=1、良い=5)	欠食 (孤食) あり	欠食 (孤食) なし	欠食 (孤食) 効果		
			ATT	Z値	
朝食欠食	4.08	4.30	-0.22	-2.76	***
朝食孤食	4.39	4.29	0.10	1.21	
夕食欠食	4.07	4.30	-0.22	-2.69	***
夕食孤食	4.38	4.19	0.18	1.44	

***p<0.01, ** p<0.05, * p<0.10

5. まとめ

本稿では、総務省が実施する生活時間調査である社会生活基本調査を用いて、小・中学生の欠食・孤食の分析を行った。

時系列の推移をみると、朝食・夕食の孤食は、横ばいかやや低下傾向である一方、欠食は増加傾向にあること、新型コロナ禍で自宅で食事を食べる回数や家族と食事を食べる回数が増えたとの調査結果もあるが、5年前と比べ、2021年に共食が増えているとは言えず、トレンドとしての動きの改善は伺えないことが明らかとなった。

また、朝食・夕食の欠食・孤食は、本人の活動の影響もあるが、家庭環境の影響も同程度に大きいことがわかった。三世代家庭、核家族でも自営業の世帯の子供は相対的に欠食・孤食が少ない一方、共働き世帯、ひとり親世帯といった子どもとともに過ごす時間の融通が相対的に利きにくいと考えられる世帯で、朝夕の欠食・孤食が多くなる様子が明らかとなった。

一方、大都市居住や母親の在宅でのテレワーク就業は、子供の夕食欠食確率を一定程度抑えるということもわかった。

子供の主観的健康との関係では、孤食は必ずしも悪影響があると言えなかったが、朝夕の欠食には悪影響がみられた。

日常生活において、会話・コミュニケーションの場面は多様であるが、食事は会話が最もしやすい場の一つである。また、毎日でなくとも、可能なときに家族で食事することは、食卓の雰囲気をよくする有効な手段になるとされる (江崎・別府、2012)。核家族化、共働き世帯が増える中で、子供を健全に育てる環境を守るため、取りうる工夫や取組は、今後さらに重要性を増していくものと考えられる。

参考文献

- Austin, P. C. (2011). "Optimal caliper widths for propensity-score matching when estimating differences in means and differences in proportions in observational studies." *Pharmaceutical statistics*, 10(2), 150-161
- Glanz K, Metcalfe JJ, Foltz SC, Brown A, Fiese B. (2021) "Diet and Health Benefits Associated with In-Home Eating and Sharing Meals at Home: A Systematic Review". *Int J Environ Res Public Health*, 18(4) 1577.
- 石田章、久保紀美、牧野このみ、谷口桃子, 2017「子どもと母親の食行動・食意識と貧困」*フードシステム研究*第 24 巻 2 号、日本フードシステム学会
- 石塚理香、岩坂英巳、牧野裕子、根津智子, 2015「子供の職を中心とした生活習慣と健康関連 QOL との関連」*小児保健研究*第 74 巻第 6 号
- 江崎由里香、別府哲, 2012 「小学生の親子関係と共食観および食卓の雰囲気との関連」*日本化成学会誌* 第 63 巻第 9 号
- 衛藤久美、中西明美、武見ゆかり, 2014「家族との夕食共食頻度及び食事中的自発的コミュニケーションと食態度、食行動、QOL との関連—小学 5 年生及び中学 2 年生における横断的・縦断的検討—」*栄養学雑誌*第 72 巻第 3 号
- 大久保敏弘、三河直斗、田口湧也, 2024「在宅勤務及びテレワークが生活時間へ与える影響の分析：令和 3 年社会生活基本調査結果による分析」*New ESRI Working Paper No.71*
- 岡崎光子、飯島加奈子、小澤由佳、荻田あゆみ、2012「児童の供食と生活習慣、健康状態との関係」*日本食育学会誌* 第 6 巻第 1 号
- 會退友美、衛藤久美, 2015「共食行動と健康・栄養状態ならびに食物・栄養素摂取との関連—国内文献データベースとハンドサーチを用いた文献レビュー—」*日健教誌*、第 23 巻第 4 号
- 金子治平、花田麻衣, 2016「高齢者の孤食状況とその要因—社会生活基本調査の匿名データを使用して—」*農林業問題研究* 第 52 巻第 3 号、地域農林経済学会
- 河村昌幸、石田章、横山繁樹, 2013「中高生の朝食欠食・偏食に関する考察」*農業生産技術管理学会誌*、農業生産技術管理学会
- 中堀伸江、関根道和、山田正明、立瀬剛志, 2016「子供の食行動・生活習慣・健康と家庭環境との関連：文部科学省スーパー食育スクール事業の結果から」*日本公衆衛生雑誌*第 63 巻 4 号、日本公衆衛生学会
- 谷川涼子、古川照美、倉内静香、清水亮、戸沼由紀、鈴川一宏、2020「地方と都市部における中学生の主観的健康観と生活習慣の比較」*日本ヒューマンケア科学会誌*
- 農林水産省, 2017「平成 29 年度食育白書」
- 渡邊愛香梨、笠巻純一、宮西邦夫, 2016「中学生における自覚症状・不定愁訴・疲労と生活実態の関連についての系統的レビュー」*小児保健研究*第 75 巻第 3 号

付図表 1 変数の定義と記述統計

変数名	サンプル数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	定義
朝食欠食	4,290	0.069	0.254	0	1	朝食欠食の場合1を取るダミー変数
朝食孤食	4,290	0.058	0.234	0	1	朝食孤食の場合1を取るダミー変数
夕食欠食	4,290	0.066	0.249	0	1	夕食欠食の場合1を取るダミー変数
夕食孤食	4,290	0.027	0.163	0	1	夕食孤食の場合1を取るダミー変数
主観的健康	4,281	4.35	0.87	1	5	良くない=1、良い=5の5段階で回答された主観的健康状態
<i>(1) 本人属性</i>						
女性ダミー	4,290	0.485	0.500	0	1	女性は1、それ以外が0をとるダミー変数
11歳ダミー	4,290	0.179	0.383	0	1	11歳は1、それ以外が0をとるダミー変数
12歳ダミー	4,290	0.191	0.393	0	1	12歳は1、それ以外が0をとるダミー変数
13歳ダミー	4,290	0.184	0.388	0	1	13歳は1、それ以外が0をとるダミー変数
14歳ダミー	4,290	0.186	0.389	0	1	14歳は1、それ以外が0をとるダミー変数
15歳ダミー	4,290	0.116	0.320	0	1	15歳は1、それ以外が0をとるダミー変数
朝練ダミー	4,290	0.016	0.127	0	1	5時から8時の間、学校の人と、スポーツ又は文科系クラブの活動等(学習・自己啓発・訓練又は趣味・娯楽)をしている場合1をとるダミー変数
塾ダミー	4,290	0.064	0.245	0	1	18時から21時の間、学校の人/その他の人と「学業」をしている場合1をとるダミー変数
クラブ活動等ダミー	4,290	0.047	0.211	0	1	18時から21時の間、学校の人と、スポーツ又は文科系クラブの活動等(学習・自己啓発・訓練又は趣味・娯楽)をしている場合1をとるダミー変数
<i>(2) 世帯属性</i>						
等価世帯所得	4,184	3.79	1.82	0.22	10.10	世帯所得/(世帯人員の平方根)、単位百万円
<i>*家族形態ダミー</i>						
核家族専業主婦世帯	4,152	0.135	0.342	0	1	核家族専業主婦世帯(夫婦片方が被用者)世帯は1、それ以外が0をとるダミー変数
核家族共働き世帯	4,152	0.496	0.500	0	1	核家族共働き(夫婦とも被用者)世帯は1、それ以外が0をとるダミー変数
核家族その他世帯	4,152	0.136	0.343	0	1	核家族のうち自営業世帯等のその他世帯は1、それ以外が0をとるダミー変数
ひとり親世帯	4,229	0.056	0.230	0	1	ひとり親世帯は1、それ以外が0をとるダミー変数
その他世帯(単身赴任世帯含む)	4,229	0.088	0.283	0	1	単身赴任世帯を含むその他世帯は1、それ以外が0をとるダミー変数
<i>*居住地ダミー</i>						
大都市ダミー	4,290	0.220	0.414	0	1	大都市の場合、1を取るダミー変数
<i>(3) 調査日ダミー</i>						
母・テレワークダミー	4,114	0.033	0.179	0	1	母が在宅テレワークの日の場合、1を取るダミー変数
母・出張・サテライトオフィスダミー	4,114	0.015	0.120	0	1	母が出張・サテライトオフィス勤務の場合、1を取るダミー変数
母・休みの日母ダミー	4,114	0.116	0.320	0	1	母が休みの日(育児・介護休業、旅行・行事、療養日を含む)の場合、1を取るダミー変数
父・テレワークダミー	3,663	0.073	0.260	0	1	父が在宅テレワークの日の場合、1を取るダミー変数
父・出張・サテライトオフィスダミー	3,663	0.042	0.200	0	1	父が出張・サテライトオフィス勤務の場合、1を取るダミー変数
父・休みの日父ダミー	3,663	0.080	0.271	0	1	父が休みの日(育児・介護休業、旅行・行事、療養日を含む)の場合、1を取るダミー変数

付図表2 父の在宅テレワーク有無別、当日・ふだんの母親の仕事時間

		当日の父の状況	
		在宅テレワーク有	在宅テレワーク無
一日の仕事時間8時間以上 の母の割合	ふだん	14%	25%
	当日	14%	28%
	差分	0%	3%
一日の仕事時間9.8時間以上 の母の割合	ふだん	7%	5%
	当日	5%	5%
	差分	-2%	0%

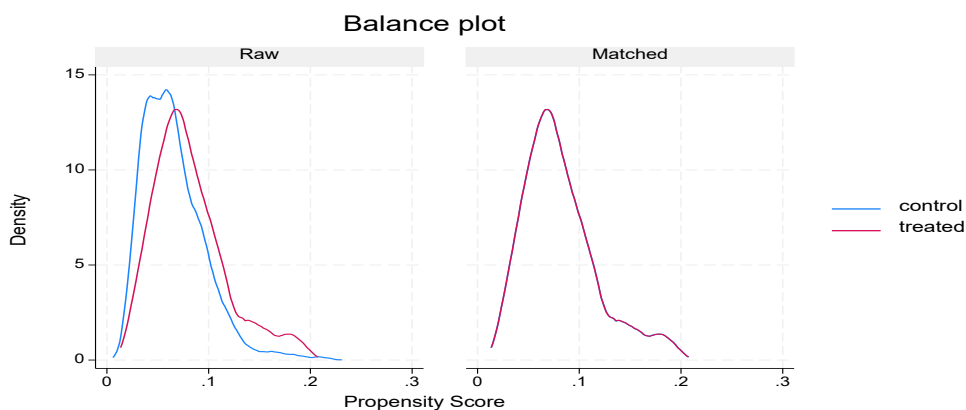
(備考)「ふだん」の仕事時間は、「ふだんの1週間の就業時間」に関する質問の回答から集計した。「当日」は、回答のあった当日の母の仕事時間により集計した。

付図表3 マッチングの状況 (朝食欠食の場合)

(Treated: 朝食欠食あり、Control: 朝食欠食なし)

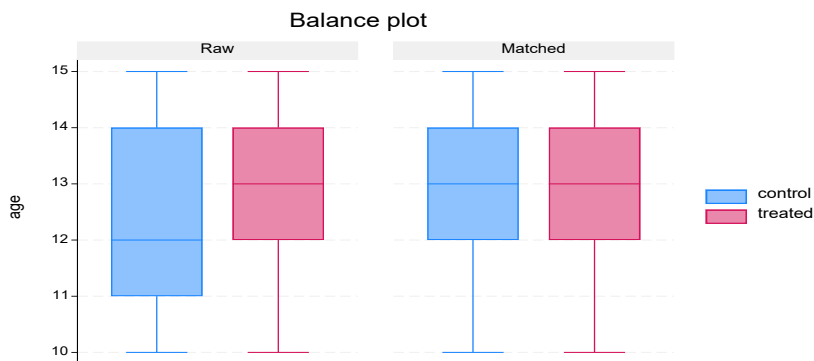
(1) Propensity Score

(左: マッチング前、右、マッチング後、横軸: Propensity Score)



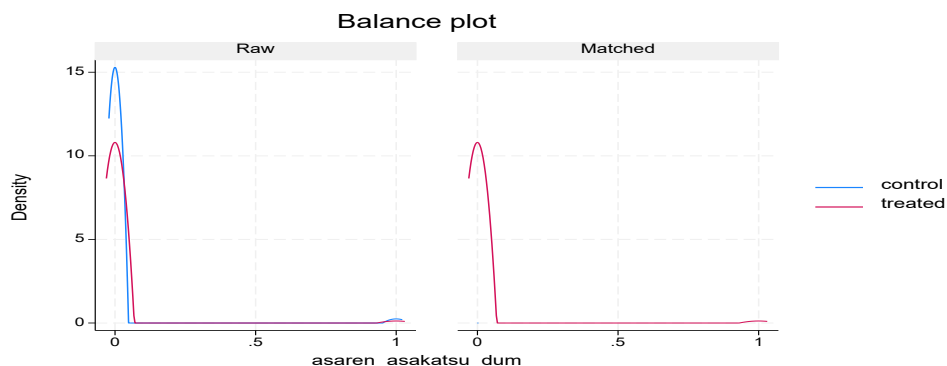
(2) 年齢

(左: マッチング前、右、マッチング後、縦軸: 年齢)



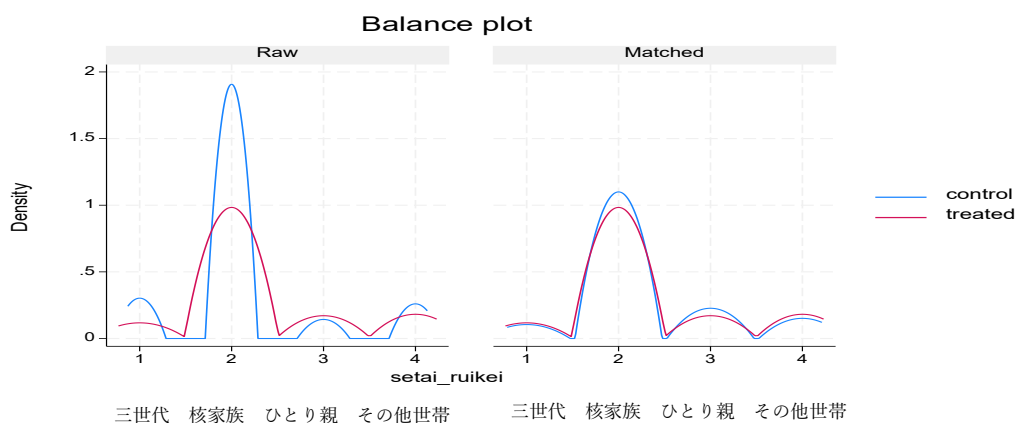
(3) 朝練ダミー

(左：マッチング前、右、マッチング後、横軸：朝練 (1 = 参加、0 = 不参加))



(4) 世帯類型

(左：マッチング前、右、マッチング後、横軸：世帯類型)



(5) 等価世帯所得

(左：マッチング前、右、マッチング後、縦軸：等価所得 (万円))

